

## 1 研究主題

# 学びの基礎・基本に基づいた確かな学力の育成

～主体性を育む豊かな言語表現を取り入れた授業づくり～

### 《主題設定の理由》

#### (1) 教育の今日的課題から

様々な課題が社会全体に混在しているこの日本で、それらの課題を国民全体で解決していくために、子供たちに「確かな学力」を身につけさせることは学校にとって大変重要な責務である。児童一人一人が、変化が激しく予測の難しい社会を生き抜くためには、社会や個人のあらゆる問題について、様々な知識や経験を生かして自ら考え、判断し、表現して解決していくことが大切になる。また、世界のグローバル化が急速に進んでいる国際社会の現状を考えると、今後ますます日本人として自分の意見を異文化の人々に伝えることは重要になってくる。

さらに、学習指導要領では、「確かな学力」に加えて、学習の基盤となる言語の能力を育成するために言語活動を充実させること、家庭との連携を図りながら児童の学習習慣が確立するよう配慮しなければならないことが示されている。

現代社会は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域の活動の基盤となる「知識基盤社会」の時代である。そこで、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、それらを活用して課題を解決するために必要な「思考力」・「判断力」・「表現力」等を育む必要がある。その重要な手だてが「言語活動の充実」である。言語活動の充実を支える「話す・聞く・書く・読む力」を基礎・基本として育てていくことは、本研究の根幹と言える。

#### (2) 学校教育目標の具現化から

- |                |
|----------------|
| 校訓 「善行・勤勉・体育」  |
| ○ 思いやる心をもつ子（徳） |
| ○ 良く考え工夫する子（知） |
| ○ 元気でたくましい子（体） |

「生きる力」の構成要素は、「確かな学力」「豊かな人間性」「健康・体力」である。これを受けて本校の教育目標も、知・徳・体のバランスのとれた人間形成を目指しており、「生きる力」の理念につながる願いが込められている。これまで、自ら学び、豊かな心を持ち、たくましく行動する児童の育成のために教育活動を進めてきた。

さらに、「確かな学力」の定着に向け、学校経営方針の重点の中でも、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着と言語活動の活性化や学習意欲の向上、学習習慣の確立が示されている。

本研究を通して、児童の思考力・判断力・表現力等を育成し、「確かな学力」の向上を図ることは、本校の教育目標の具現化につながるものである。

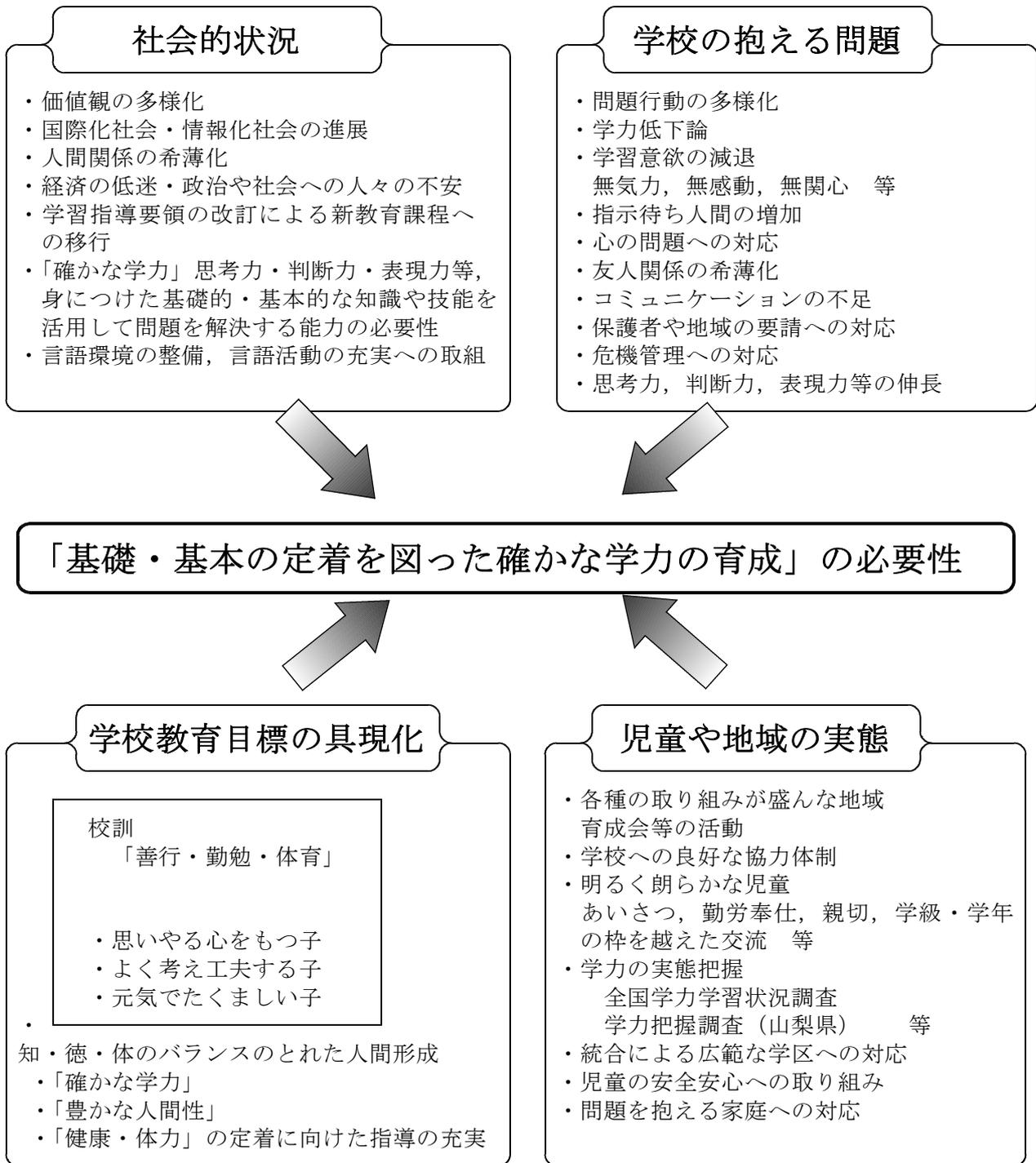
#### (3) 児童の実態・課題から

全国学力・学習状況調査や県学力把握調査、学校評価、昨年度までの校内研究の振り返りから、本校児童の課題点として、次のような点が挙げられる。

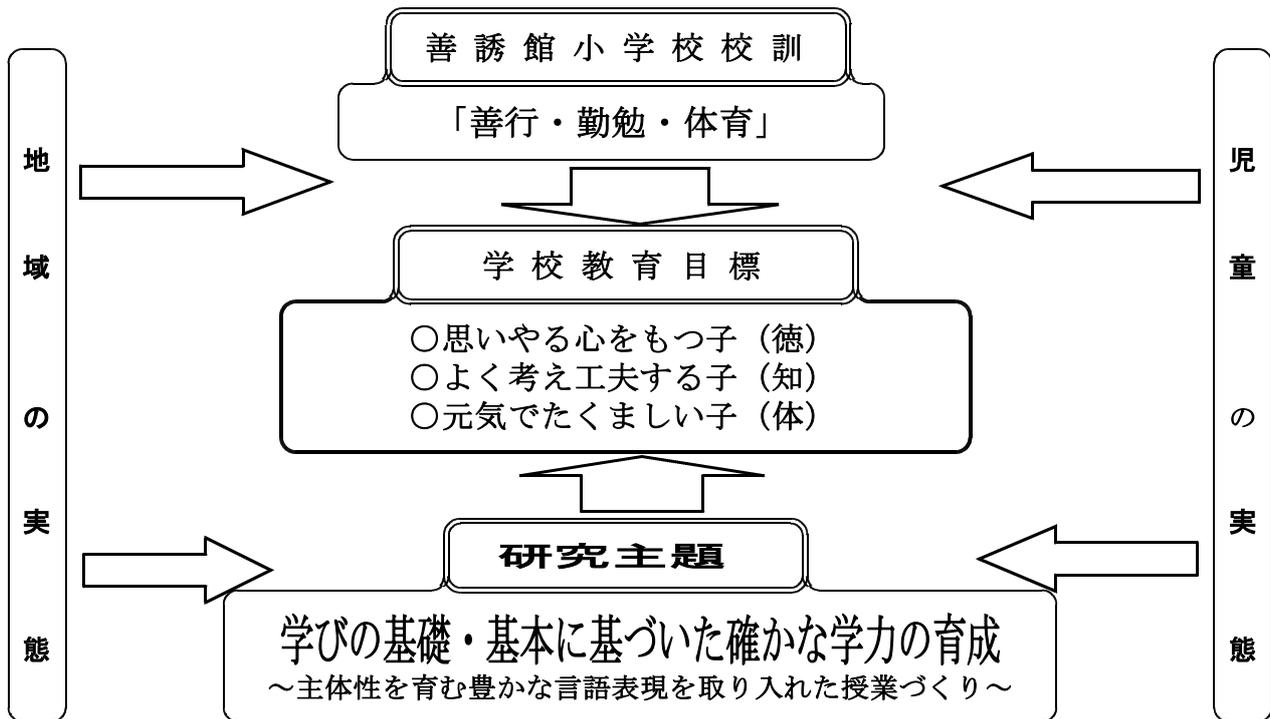
- ・学習意欲・理解に個人差が大きい。
- ・筋道を立てて考えたり、理由や根拠を示して説明したりする力が弱い。
- ・学習面・生活面ともに、特別な支援を必要とする児童がいる。
- ・家庭学習の習慣について、内容や質に個人差がある。
- ・少人数であるがゆえ、多くを語らなくても相手が思いをくみ取ってくれるため、互いの思いを伝え合う力が乏しい。

以上のような実態を踏まえ、児童に確かな学力を身に付けさせ、自己を表現できる児童を育成

するために、「言語活動の充実」の話す・聞く・書く・読む力を育てることが重要である。また、学習習慣の定着に個人差がある問題を踏まえて、家庭との連携を深めながら、家庭学習を工夫し、授業と有機的に結び付けるような指導方法を研究していく必要がある。



## 2 研究の基本的な考え方 《学校経営の重点と校内研究》



### 研究主題について

- (1) 「基礎・基本の定着」とは、「生きて働く力のもとを身に付けること」
- 基礎……あらゆるものの土台になる力  
前学年の知識・技能，これまでに培ってきた学び方や表現力など
  - 基本……基礎の上に作り上げていく力  
現学年の知識・技能，学び方，思考力など
  - 基礎・基本……学習を成立させる基本的な学力で，繰り返し学習することにより身に付き，次の学習に繰り返して生かせるもの  
「読む」「書く」「聞く」「話す」「計算する」「調べる」「まとめる」などの力。また，生活習慣，考え方，学び方。
  - 定着……学習で学んだ内容が「書ける」「話せる」「操作できる」など，他者からも客観的に見てわかるように表現できる状態にまで高めること，生活の中で生きて働く力として「応用できる」「適用できる」状態ととらえる。
- (2) 「確かな学力」とは  
基礎的な知識や技能はもちろんのこと，これに加えて学ぶ意欲や知識や技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力などを含めた力である。
- (3) 「主体性を育む」とは  
本校児童の課題としてあげられた「根拠のある意見を書く児童がなかなか育っていない」ことについては，学力状況調査においても本校の課題として指摘されている。そこで，国語科だけではなく，日常の授業及び生活指導から論理的思考力を育むための教師のかかわり方や取り組みについて共通理解のもと研究していく必要がある。そこで，子供の主体性を育むといっても子供任せにするのではなく，子供一人一人の状況に応じて，子供の主体性を尊重することと，教師が指導性を発揮することをバランスよく行うことが重要である。つまり，「主体性を育む」とは，「子供が自ら課題をみつけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，よりよく問題を解決する力を育てていく」ということである。

#### (4) 「豊かな言語表現」とは

人間関係が希薄になっている現代においては、子供たちが将来にわたって、人とよりよく関わる力、自分の思いを伝える力、つまりコミュニケーションを図る能力を向上させていく必要があると考える。本校では、特に次に示す4つの言語活動を教科や外国語活動等の授業を通して高め、生活や学習のあらゆる場面で、自分の考えや思いを分かりやすく自己表現できる力を、子供たちに育てていきたい。

##### ・話す力

- ①語彙を豊かにして、的確に表現できる。
- ②自分の思いや考えを根拠をもって伝えることができる。

##### ・聞く力

- ①自分の思いや考えとの違いを整理しながら、相手の話を受け止めることができる。
- ②相手の話を的確に捉えることができる。

##### ・書く力

- ①客観的な根拠や理由に基づいて、自分の考えや意見を書くことができる。
- ②自分の気持ちなどが正確に相手に伝わるように書くことができる。

##### ・読む力

- ①文章の構成や論理の展開に沿って、内容を読み取ることができる。
- ②さまざまな描写をとらえ、内容を的確に理解できる。

したがって、「豊かな言語表現」とは、語彙や表現が豊かであることに加え、子供自身が自分の表したい方法で自己表現できる活動といえる。活動を積み重ねていくことによって、コミュニケーションを図る力を高め、子供たちの自己肯定感や、より自分らしく生きることができると考える。

#### (5) 「授業づくり」とは

本校の校内研究で考える授業づくりとは、

- ①教材教具の工夫や様々な手だてを用いて、
- ②子供たち一人一人の考えを引き出し、
- ③学習形態の工夫による学び合い活動につなげ、
- ④「ねらい」に迫る学習活動を展開し、
- ⑤評価・改善していく。

といった、一連のサイクルを確立し、日々の授業改善に生かしていくものである。

また、学習活動において、子供同士・子供と教師等、双方向的なコミュニケーションを意図的に仕組む（言語活動等）ことによって、学び合い高め合う学習集団づくりを目指していくものである。

以上のように研究主題をとらえ、「確かな学力」を育成するために、各教科等において、「話す・聞く・書く・読む」力を活用した「豊かな言語表現」を取り入れた「授業づくり」に重点をおいて行う。

尚、本校内研究会では、教師一人一人が一人一実践として授業実践を行う中で、研究授業や授業観察を通して、「授業づくり」の手だてや工夫を共有していくことを研究の中心としていくものである。

### 3 研究目標

各教科の学習において、学習の基礎・基本である「話す・聞く・書く・読む」力等を育てる工夫に取り組むことにより、学習意欲が高まり「確かな学力」が育まれていくことを実践を通して明らかにしていく。

### 4 研究の内容

#### ①授業研究

##### ○学習過程の工夫

つかむ（問題把握） → 考える（自力解決） → 深める（学び合い） → 広げる（発表）

##### ○課題設定の工夫

児童が、興味・関心のある課題、わかりやすい課題、イメージしやすい課題 など

- 教材・教具の工夫
  - ICT活用，具体物，半具体物，学習掲示物，ワークシート など
- 思考・表現の型の活用
  - 学び合うための話し方・聞き方，考え方の表し方，発言の仕方の話型 など
- 学習形態の工夫
  - 全体，小グループ，ペア，個 など
- 学習評価の工夫
  - 自己評価，相互評価 など
- 学年・学級経営の工夫
  - 各学級での日常的な取り組みや家庭学習の充実 など
- 家庭との連携
  - 家庭学習の習慣化（学年×10分＋10分以上） など
- ②教育環境の整備
  - ユニバーサルデザインを取り入れた教室・校内掲示の整備
    - 学力向上に資する掲示物（写真やイラストの活用）
  - 読書活動の推進
    - 週2回のさわやか朝の読書，読み聞かせの充実
  - 朝学習の充実
    - 週1回の朝学習の計画立案（基礎・基本の定着）

## 5 研究の方法

### (1) 児童の実態把握と課題の明確化

- ① 個人差が大きい → 基礎基本の学力としての底上げ
- ② 学習意欲の喚起 → 子供たちの興味関心を引きつける教材教具の研究及び開発，効果的な提示 ※個人学習（作業的な学習場面）の集中力の継続にも関わって
- ③ 学び合い高め合う児童の育成 → 学習形態の工夫（ペアやグループ学習の組み合わせ）
- ④ 学習場面の切り替え → 「聞く」「考える」「話し合う」「書く」
- ⑤ ノートづくり → ユニバーサルデザインの導入

ユニバーサルデザインを取り入れた授業（基本的な視点）

- ユニバーサルデザインを意識した授業づくりや学級経営を心がけていく。（画一化するのではなく，学級や子供たちの実態に合わせて，ユニバーサルデザインの定義や手だてを確認しながら各自工夫して取り入れていく。） → 一人一実践として報告
- 視覚化：教材，学習内容，板書等を視覚的に捉えやすくすること
- 焦点化：学習のめあてや内容を子供たちがわかりやすいように明確にすること
- 共有化：互いの考えをみんなで伝え合い共有できるようにすること

### (2) 授業研究の実施

- ① 全学年において児童の実態に応じた手だてを工夫し豊かな言語表現の充実を検証する。
- ② 研究授業を設定する → 研究授業に向けて指導案づくりや教材研究等，検討していく。
- ③ 授業研究による成果と課題を話し合う → 指導主事を招聘し，指導を仰ぐ。

### (3) 言語環境を整えるための日常的な活動の推進

- ① 読書活動の推進
  - (ア) 読み聞かせ (イ) 図書館の利用 (ウ) 市立図書館との連携 等
- ② 日常活動における取り組みの推進
  - (ア) スピーチ (イ) 音読，群読 (ウ) 百人一首 (エ) 掲示物の工夫，新聞の活用 等

### (4) その他

研修の充実

- ① 一人一実践（教科は授業者に一任）として，可能な限り授業観察等，お互いの実践や児童の様子を観察する機会と捉え，積極的に校内で周知・公開していく。
- ② GIGAスクール構想の推進に合わせ，研修計画に基づき各種研修会に参加し，随時，環流報告や校内研修会の開催等により，研修内容を全職員に広めていく。

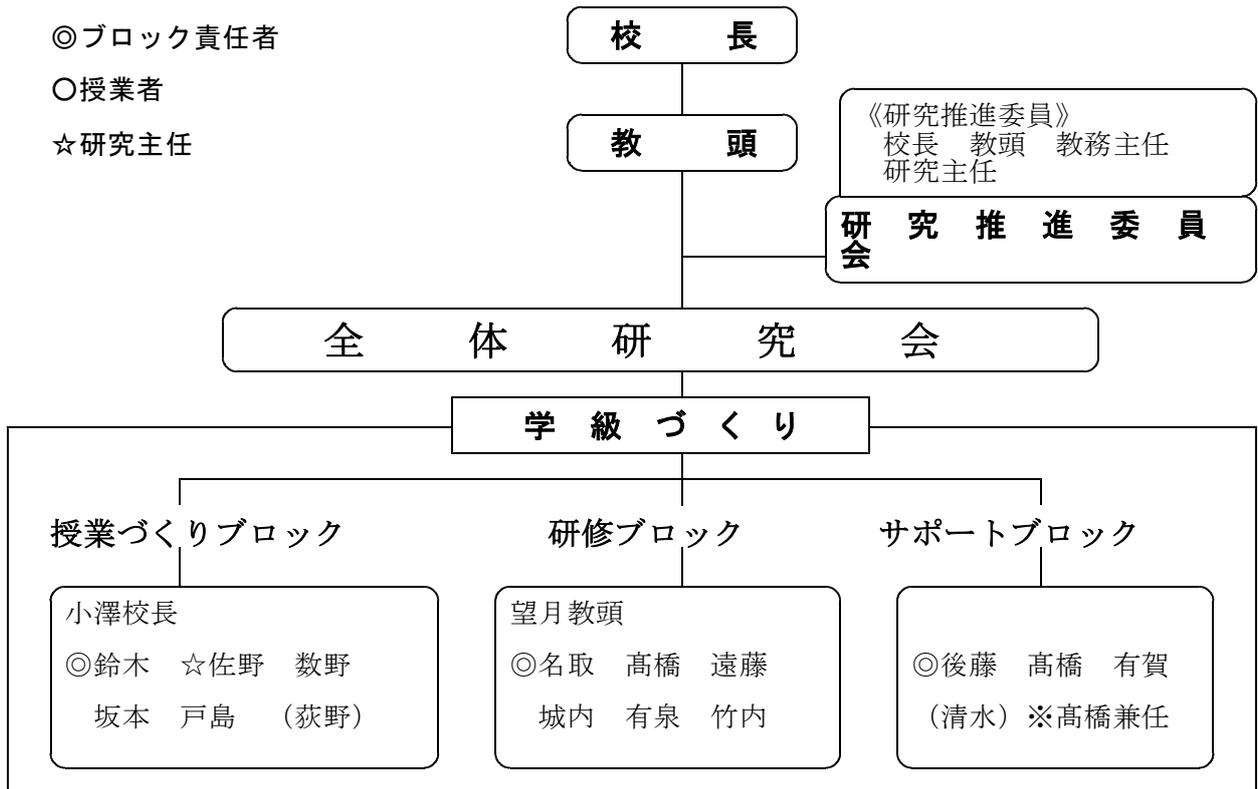
☆ 研究紀要の作成 → 研究の概要，実践事例（一人一実践の記録集），研究の成果等のまとめ

## 6 研究組織

◎ブロック責任者

○授業者

☆研究主任



\* 推進委員会…主に原案作成，ブロック間の調整，学力調査等の児童の実態把握等を担当する。

## 7 研究計画

### 令和3年度 校内研究会 研究計画

| 月  | 日  | 曜 | 回    | 内 容  |
|----|----|---|------|--|
| 4  | 19 | 月 | 第1回  | ◇本年度の研究の方向性と研究計画について（意見交換）   |
| 5  | 17 |   | 第2回  | ◇研究計画・研究組織提案と決定<br>①研究授業の進め方<br>②研究組織の確認 等<br>◇研究の概要の提案と決定<br>①研究主題・副主題 ②研究目標 ③研究内容と方法 等 |
| 6  | 21 | 月 | 第3回  | ◇英語研修会（講師：堀田誠先生）   |
| 7  | 26 | 月 | 第4回  | ◇サポートブロックの研究の概要報告<br>◇各学年HP更新<br>◇ブロックごと（研究授業について，今後の計画 等）                               |
| 8  | 20 | 金 | 第5回  | ◇環流報告会（教育課程研究協議会，各種研修会）<br>◇GIGAスクール構想に関わる研修等に関する環流学習会①<br>◇ブロックごと                       |
| 9  | 7  | 火 | 第6回  | ◇研究授業と研究討議（全体での指導案検討①）<br>◇ブロックごとに理論研究と授業案の作成  |
| 10 | 25 | 月 | 第7回  | ◇研究授業と研究討議（全体での指導案検討②）（指導主事の要請）<br>◇GIGAスクール構想に関わる研修等に関する環流学習会②                          |
| 11 | 22 | 月 | 第8回  | ◇研究授業と研究討議   |
| 12 | 8  | 水 | 第9回  | ◇研究結果の検証と考察<br>◇GIGAスクール構想に関わる研修等に関する環流学習会③  |
| 1  | 24 | 月 | 第10回 | ◇研究のまとめ（成果と課題についての考察）  |
| 2  | 21 | 月 | 第11回 | ◇本年度の研究の反省と次年度の方向性について   |